

幕末洋学史における適塾の地位：「福沢屋諭吉」前史研究として

長尾, 正憲 / NAGAO, Masanori

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

1975-03-22

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011723>

幕末洋学史における適塾の地位

——「福沢屋論吉」前史研究として——

長 尾 政 憲

一、はじめに——問題設定

洋学が幕藩制社会に果した歴史的役割の評価として、早くから二つの主張が対立してきた。⁽¹⁾ その一は封建イデオロギーへの批判者の性格に着目する羽仁五郎——藤原治——高橋磯一ら諸氏の主張である。その二はこれに反論する伊東多三郎・原平三・沼田次郎氏の所説であって、封建社会の補強者としての自己制約的の立場を重視し、とくに幕末洋学においては軍事科学的側面からの絶対主義への傾斜が幕府・雄藩によって強化され、かくて洋学者の社会階層も「医者から士族へ」と移っていったと論じている。

問題を幕末洋学史に限ってみるとき、後者の方が説得力があり定説化してきたようであるが、個別具体的にみるときなお補充修正を要する点が指摘できる。とりわけ沼田氏が「かの国学が、農村の、特に資力ある農民層の中に広汎な支持を見出したような事実」に似た事情は、洋学の場合は、全くその例を見ぬといつて良⁽²⁾い」といい、「草莽の国学」に似た「草莽の洋学」を否定してい

るのは正しいであろうか。

主題の緒方洪庵の適塾は、市井の一私塾であったが、その『適々斎塾姓名録』に六三七名の入門者を記している幕末でおそらく最大の蘭学塾であった。小論は明治前期における最大の英学塾たる慶応義塾の創設者福沢諭吉がその人間形成をはたした安政二—五年の時期を中心として、適塾の実態と地位をあきらかにすることにより、一は幕末洋学史論の補完にあたるとともに、二には年来継続中の「福沢屋論吉」の前史研究の一部にあてようとするものである。

二、適塾の開塾

緒方洪庵の大坂での活動は、天保九年（文久二年）の二四年間にわたる。適塾は天保九年三月に医業開業のかたわら開かれた。洪庵（二九歳のときで、間もなく七月に妻（一七歳）⁽³⁾をめとった。父の佐伯瀬左衛門惟因（備中足守藩）からの書簡には「其元當時住居家貧之事、如何ト先達而申遣候処、此度委細御申越十八兩二而

ハ大ニ安ク御座候、絵図面ニ而ハいつれ廿四五両ハ出可申と存居候」⁽⁵⁾と借家の家賃について述べ、十一年十月二十五日付で「扨大坂市中売弘當時医師角力番附一枚御調越し早々打寄熟覧いたし候、開業漸く一兩年ニ成候処、幕ノ内ニ而も中以上ニ書出し候位誠ニ御手柄と存候」といい、また「當時書生相増し多人數之由、三度ノ仕出賑が成事にてこまり被申候由、尤ニ御座候」と入塾者が多く、結婚後までもない洪庵夫妻が悲鳴をあげている様を記している。

ここに至るまでの洪庵の蘭学歴を簡単に記すと、通算十か年のキャリアがある。⁽⁴⁾

1、文政九年七月（一七歳）～十三年四月（二一歳） 大坂の中間（天游）に就学。

当時、父は足守藩蔵屋敷留守居役

2、天保二年二月（二二歳）～六年二月（二六歳） 江戸で坪井信道に就く。

その間に師の恩師宇田川榛斎の指導もうけ算作阮甫にもみとめられる。

3、天保七年～九年（二七～二九歳） 長崎に遊学。師の名は不明であるが、青木周弼（シーボルト門下）らと共訳がある。

このうち最初の師の中天游は、大槻玄沢門の海上随鷗（稻村三伯）門下といわれ、大槻玄沢の学統につながる。

こうして、洪庵は、上方・江戸・長崎と当時の幕末蘭学の三大中心地との学問的接触交渉のルートをつかんだ上で、町人の都大坂に本拠を置いたのであった。

瓦町の塾はまもなく盛況を呈して手ぜまとなり、天保十四年十二月、過書町に家を買ひもとめた。父からの書簡（十二月十日付）には「此度ハ御買求之由、嘸大金と存候、成ルほと分限過之儀ナレトモ、思ひ切よく御求メ御手柄ニ御座候」とあり、借家から家持となったことを喜んでゐる。「福翁自伝」や「松香私志」で福沢諭吉や長与専斎が生き生きと描く適塾生活はこの過書町（現在の東区北浜三丁目）の塾で展開されるのである。

三、適塾の発展

『適々斎塾姓名録』⁽⁶⁾は過書町移転の翌年一月からはじまり、文久二年八月洪庵の江戸移住後の二五名を含む六三七名の署名をのせている。中で冒頭部分の七〇名には入門の日付がなく、弘化三年五月十六日入門の内藤信郷から日付が明記されているから、右の七〇名中の若干名は瓦町の塾から移って来たものである。

この『姓名録』の日付記載は嘉永年間にはいると著しく整然として来るし、入門者の数もちだんとふえてくる。そこで適塾と並んで東西二大蘭学塾と称せられた江戸の伊東玄朴が開いた象先堂と対比して、天保一弘化期、嘉永期、安政期、万延文久期と四時期に小区分して入塾生の増加状況を見ると、第1表のようになる。

これで見ると、創業期の天保弘化期に劣勢であった適塾が嘉永期以降圧倒的に優勢になったことがよくわかる。⁽⁷⁾

天保十四年十一月十九日付で恩師坪井信道が洪庵に出した書簡に「内々相伺候大兄御事、仕官之御望も御座候由、岡部元民々承り候、愈々左様御座候や夫ナレハ少し心あたり之事も御座候、出

第1表 入門者数

	適 塾		象 先 堂	
	入門者	小計	入門者	小計
～弘化4		112		175
嘉永1	19		11	
2	40		21	
3	27		13	
4	14		19	
5	38		10	
6	26	164	20	94
安政1	44		31	
2	40		20	
3	38		15	
4	34		19	
5	32		4	
6	52	240	6	95
万延1	47		5	
文久1	35		15	
2	15		7	
3	7		3	
元治1	17	121	12	42
計		637		384

(象先堂は慶応元・2年にそれぞれ15名、7名あり)

ことが察せられる。

以下において、嘉永期を橋本左内に、安政期を福沢諭吉・長与専斎に代表させ、適塾の教育課程、塾の構成、塾則ならびに塾風について述べよう。

四、適塾の教育課程

1、一般教育中心の教育

長与が⁽¹⁰⁾「元来適塾は医家の塾とはいえ、其実蘭書解読の研究所」で「読書解文の事をこそ修めた」といっているように、一般

来候へハ随分よろしき処と相考申候」といい、つづいて十二月十七日付で「一仕官之事、過日相伺候処、思召無之候ニハあらされとも、デリーモンド之儀も有之候へは、他諸侯モモラヒと申事ニ無之候而ハ六ヶ敷趣被仰下、御尤之儀奉存候、右相含ミ居急度宜敷と存候方御座候ハ、早速可申上候、何れ大家ナラサレハ右様ニハ出来申間敷候」と洪庵が天保十年以来足守藩主から三人扶持をうけている制約がありながらも仕官志望をもち内々運動していることを示している。

しかし塾生が増加した嘉永期にはいと、塾の教育にたいする熱意も高まり「当時は病用相省き、専ら書生教導いたし、当今必用の西洋学者を育立候積に覚悟し、先づ是を任といたし居申候」と書簡に記すようになっていた。⁽⁹⁾ こうした点からみても、嘉永期が適塾の発展期であり、それが安政期にいつそう充実していった

教育的な語学習得が適塾では教育課程の主力を占めていた。その点では適塾につづいて長崎の医学伝習でボムベに学んだ長与がそこでうけた医学の専門教育に感激して「平易なる言語即文章を以て直ちに事実の正味を説明し、文字章句の穿鑿の如きは毫も歯牙にかかることなく、病症薬物器具其他種々の名物記号等の類、曾て冥搜暗索の中に幾多の日月を費したる疑義難題も物に就き図に示し、一目瞭然掌に指すが如く」であり、「摘句尋章の旧習を脱し、直に文章の概要を領して、専ら事物の究理を研究する」「蘭学の大勢一変」を述べているのと比べて特徴的である。

洪庵が江戸に出てから、その主宰する西洋医学所で指導をうけた池田謙斎が洪庵の死後、同じボムベの薫陶をうけた松本良順から「医者になるは先ず理化学から解剖・生理・乃至は薬科・内科・外科の七科の学問」を習得すべきだといわれ、「むづかしい本

ばかり読むでも医者に成る為にはならぬ」と否定された中で「緒方の方はむづかしい本ばかり読ましたもので、「ナチュリーキューンデ」といふ物理の大変にむづかしい文章や、それがすむとすぐリ、セランドの「ヒシオロギー」を読ますといふ風。それも中は読まないでむづかしい序文を読む……村田や福沢が塾頭の頃右のリ、セランドの序文が読めると、すぐ塾頭になれる資格」があったといっているのも、蘭語読解力の習得が適塾の主目的とされていたことをリアルに示している。

2、学習方法

蘭語読解力の習得は、会説(福沢)⁽¹²⁾ または輪講(長与)によったことが特徴である。以下福沢と長与の伝えるところには若干差異があるが両者総合して整理する。

(1)、級別 三段階にわかれていた。

ア、初級(初学)Ⅱ文典の級……入門当初

・初級文典の会 ガランマチカ(語法篇)を教え素読を授けるかたわら講釈も聞かす。

・文典後編の会 セインタキス(文章論)について前と同じこの文法書は坪井信道が早く天保二年からテキストに使用しており、洪庵はこれを踏襲したのである。箕作阮甫がそれぞれ天保一三年、嘉永元年に復刻本を出している。

イ、上級(会説生) 八級にわけ一級が最上。上級から会説(輪講)をさせる。

ウ、最上級 最上等の塾生のみから成り、互いに会説をしたリ、洪庵の講義を聴聞する。

(2)、上級(会説生)の会説(輪講)のやり方は塾の蔵書である物理書・医書(福沢によれば十部にたりなかった)をめいめいに写した写本をテキストに一日の会説分は半紙三〜四枚程度を準備し、会説前夜までに一部ずつしかないゾーフホルマの蘭和辞書またはウエーランドの蘭語辞書をひいて準備する。会説は級ごとに月六回(一六または三八⁽¹³⁾の日)で、会説の分担は当日クジ引きで決め、その順に数行ずつ講じて次番者に移す。そのさいの評点のつけ方は、分担分の解釈の可能・不可能による(福沢)、次番者から順次質問をし勝負をつける(長与)、質問してわからぬとき討論をして勝敗をきめる(池田)と若干相違があるが、それぞれ会頭が成績を定め、△、○の三段階として、成績の総和をして、各級一番の上位を三ヶ月占めれば一級上に進級する。

以上のようにして進級し、最上級となつてはじめて、洪庵の講義を願うことができた。

池田のばあい、文法書も輪読でやり、質問は文章の意味から性質格、前置詞・接続詞・間投詞……と問いつめ、綿密で、大いに力がついたと述べている。

この会説は「正味の實力を養う」ことに成功し「凡そ勉強と云ふことに就ては実に此上に為ようはない程に勉強」させた。「輪講の勝敗は一身面目非常の競争」で「一語一句とも私かに人の教を乞ふが如き卑劣のことをなすものなく、皆自分一己の工夫を凝らして学力を闘は」す真剣な学力錬磨の場であった。

それだけに個人差も生じたわけで、橋本左内のばあい嘉永二年

(一六歳)秋冬の頃に入塾して四年七月八日付書簡で「小生近來原書進候由是ハ洪谷(良耳)潤色と奉存候。自分心ニハ甚驚鈍嘆居候。漸く先日ハ文法書終業致、是の頃昆斯相始候。独見ニて腹稿致候上ニて講釈相頼候。誠に不堪眩暈候。御一笑可被下候。」と述べ、約二年にして文法書をおえるとすぐコンスブルックの病理学書(嘉永二年四月洪庵の「病学通論」三巻が刊行された。天保五年宇田川榛斎の遺囑をうけ諸種の原書を参考にまとめたもの。昆斯もその一つ)を会説テキストにされ困惑している状況を知らせている。

3、原書の筆写

なお同じ書簡で橋本は『扶氏経験遺訓』原書(洪庵の訳書は文久元年出版完了)筆写について記し、「宮永(良山)氏原書落字有之旨気毒之至ニ御座候。今度差上候扶氏書ハ決て誤脱可無之と被察候。文字も随分立波、塾中にて一二之書手ニ御座候」といい「扶氏書価ハ大抵悉皆ニて六両計と申事ニ候。紙数四百枚余ニ三百枚ト申事ニ候」といっているが、九月十三日付書簡では「扶氏遺訓今便校読相訖候分百十二枚指上候。御落手可被下候。扱筆者ハ申出候ハ、拙も当年中ニハ出来不申候間、下巻ハ他人ニ御頼み可被下候」といい、また「遺訓校読一度致候共、定て謬誤間々可有之候間、若御不審有之候時ハ、P. 1. 幾葉第幾行と御書し、前後之文一二行程御記し御遣可被成候、小拙早々原書と再校可致候」と述べている。ちなみにについて記したその筆写料内訳は第2表のとおりである。

これについて福沢は写本が「書生の生活の種」になったとい

幕末洋学史における適塾の地位(長尾)

第2表 扶氏遺訓筆写料

紙1状ニ付	400文
写料1枚ニ付	6分
表紙料1冊ニ付	1匁4分
校読料60枚	4匁5分
ただし1状=48枚	
校読料は別人依頼2日分	

い、写本代半紙一枚十行二十字詰で何文という相場があり、「ゾーフ辞書は一枚横文字三十行で横文字が十六文、日本文字の注が六文だから三千枚写すと大きな金高となった。適塾の在塾入費は月一分二朱(約二貫四〇〇文)と一分三朱(a)だから一日十枚ゾーフを写せば百六十四文になり余るので、写本は「蘭学書生に限る特色の商売であった」と述べている。

こうした学問に密着した「特色の商売」の経験は、『福沢屋論吉』の前史としての意義をもつものといつてよいであろう。

五、塾の構成と塾則

1、歴代の塾頭

適塾の教育は、塾生相互の演習中心の自己研修に中心をおき、洪庵は最上級生にのみ講義をし、本業の医業の回診や著訳活動、ならびに大阪除痘館(嘉永二年分苗)を中心とする種痘事業や「虎狼痢治準」(安政五年刊)によるコレラ対策など社会医療的活動に多忙であった。それだけに、塾生の指導・監督の任にあたる塾頭(塾長・福沢)の人物が問題であった。以下文献に散見する塾頭を年代順に配列すると、(括弧内は『姓名録』入塾者記号)

(1)、奥山静叔(三四)肥後。天保十五年弘化頃入塾、塾長歴五

年以上。⁽¹⁶⁾

(2)、村田良庵、改藏六(五二)防州。弘化三年入門、嘉永元年再入門、翌二年と三年塾頭。『大村益次郎』によると「嘉永二年閏四月、適々斎塾より江戸堀四丁目伊藤屋敷前の倉敷屋作右衛門の座敷に外塾す」とあり、塾外に住居して通塾し、塾頭を勤めている。

(3)、飯田柔平(一一)防州。入門年月日不明であるが、『橋本景岳全集』嘉永四年五月二十七日の橋本書簡で当時の塾頭たる飯田が、「耽色使酒等の振舞」で先年退塾し昨年帰塾した経歴の持主であることを記している。⁽¹⁷⁾『姓名録』記載の前後関係からみて最古参者にちがいない。

(4)、伊藤精一、改慎藏(一三八)長州。嘉永二年二月入門。三月入塾。長与が入塾した安政元年六月当時の塾頭。二年十一月、越前大野藩に禄をはむことになった。洪庵の『癸丑年中日次之記』嘉永六年七月四日条によると、「伊藤精一事去る朔日破門いたし置候処、中環宅より今日亡命いたし候由来る」とあり、⁽¹⁸⁾洪庵の命にそむく行状があつて破門されたことがわかる。

(5)、栗原唯一(一七九)京都。入門年月日記載なきも、嘉永三晩春入門の大田良策がすぐ前にあり、嘉永二年秋冬入門の橋本左内(一八三)より四人前に記名されているから嘉永一―三年の入門であろう。安政二年末塾頭就任。

(6)、松下元芳(二八九)筑後。嘉永七年五月入門。福沢の安政四年塾頭就任から逆算して、(5)の栗原とともに、松下の塾頭期間は一年未満のようである。故郷久留米藩に帰藩し、間もなく病

歿。

(7)、福沢諭吉(三二八)中津藩。安政二年三月入門、翌々四年塾頭。「其後私の学問も少しは進歩した折柄、先輩の人は国に帰る。塾中無人にて遂に私が塾長になった」と福沢が述べているのは、前記松下の後任たることを示している。

(8)、長与専斎(三〇一)肥前。嘉永七年六月入門、在塾満四年経過し、安政五年十月福沢江戸出府の後をうけ、翌六年暮、洪庵の勧めで長崎に下りボムペに就く。その間一カ年塾頭。

(9)、山口良哉、改良藏(三六四)浪速。安政三年二月入門。『福沢諭吉伝』に塾頭をつとめたとしている。(後に福沢の偽版一件では大坂にあつて対策に尽力した)

(10)、斎藤策順(三八二)越前府中。安政三年六月入門。『武生市史』は福沢に次いで塾頭をつとめたとしている。⁽¹⁹⁾

以上は管見にふれた塾頭であるが、中に飯田や伊藤のように「女色」や「不埒」の経歴をもつものもあるが、概して学業、品行優秀で在学期間の長い者が任じられたらしい。福沢は、塾長に権力はなく一般塾生同様に学問にはげんだといえながらも、最も難しい原書会読の会頭を勤め、塾風をよくするため、いばつて矯正にあたつたと述べ、長与は塾頭就任の報を聞いた母が「深く悦び学事は既に成就した」ものと思つたと記している。塾頭の声望、権威の大きかったことが知れる。

なお塾頭とならび塾監があつたことは『松香私志』にみえ、橋本左内も「塾監渋谷良耳」の動静を国もとに報じている。塾監は内塾生の生活指導に責任をもつものであつたと思われる。

2、塾 則

江戸の伊東玄朴の象先堂には、厳格な塾則があった。すなわち、

一、蘭書並翻訳書之外雑書類読候事一切禁止

一、飯酒雑談堅無用

一、外出一月五回之外決而不相成、若不得止事遅刻止宿之節者、

請人より印鑑付之書状持参之事

一、入湯結髪者一々奥え相屈、札差出、帰塾之上無失念札請取可申事

一、毎朝五ツ時(午前八時)迄奥え札差出、夜四ツ時(午後十時)請取可申事

右件々相背候節は廿日禁足、並調合処当直可相勤、若及再三者退塾之事(『伊東玄朴伝』⁽²⁰⁾)と読書内容から外出、出席状況確認に

いたるまで規制している。適塾にはこのような厳格な塾則はなかったらしく飯酒、外出外食など自由奔放であったことは福沢が自伝で語っている。

3、入門料

象先堂のばあい表3のとおりで合計六五〇疋(一兩一分余)となる。適塾もほぼ同様で、緒方家へ束脩を納めると同時に塾頭へ金貳朱を納めたから塾頭は小遣銭に困らなかったと、福沢は記してい

る。洪庵への束脩は不明だが、象先堂の比率を適用すると、先生と奥方で入塾者一人につき金三分となる。

4、請 人

入塾生の身元引請には請人を要した。象先堂のばあい、武家請状としては、

右之人此度御門人相願候処御聞濟被下貴座へ寄宿仕候上は万事御座法通り為相守可申候、万一病氣等は勿論如何様之義出来仕候共、拙者引受、御難題相懸中間敷、若無抛用事有之遅刻止宿等仕候節は、拙者印鑑付之断書状持参にて致帰塾候様可仕候、為後日如件

月 日 何之誰 何某 ㊦

(町人請状は居処を記入する以外同断)と塾則に対応した文面になっている。象先堂の『門人姓名録』記載の四〇六名中、入塾年月日のある二九四名についてみると一八二名は請人を明記している。請人なきものは身計のはっきりした藩籍ある者のようである。

これに比べ適塾の『姓名録』には、紹介人とあるもの二名、請人とあるもの六名とあり、一名を除き万延二年以降の入塾者になっている。しかし、洪庵の恩師坪井信道が伊東玄朴の養子玄敬の入門希望を洪庵に伝えた書簡に「尤請人之義ハ別人相立可申候候へ共、上坂之目直ニ貴家様へ罷出可申」と述べているのからみると、⁽²¹⁾紹介人の紹介(『姓名録』巻頭の記載例にも「紹介人」とある)と、入塾のさいの請人が慣行となっていたようである。

福沢のばあいも『姓名録』に請人の記載はないが、兄福沢三之助が最初の入門時の請人で、兄の死後の再入塾のさいは藩に「砲

表3 象先堂の入門料

束脩	金	200疋	扇子	1箱	先生
鼻紙	金	100疋			奥方
料	金	50疋			先生
	金	50疋			塾頭
	金	200疋			中僕
	金	50疋			塾

術修業」願書を出して上坂したから、中津藩の藩命形式をふんだのであろうが、学費がなく特別に食客生にしてもらった。

5、入塾年令と在塾期間

これらは個人差があつて一様でないが、概括というと、a十歳台のグループに伊藤貞斎(一六五)一〇歳、橋本左内(一八三)一六歳、長与専斎(三〇一)一六歳、伊東玄敬一八歳など、b二〇歳台に織田貫斎(二三五)・斎藤策順(三八二)や福沢諭吉(三二八)二二歳、村田蔵六(五二)二三歳、菊地(箕作)秋坪(一五七)二五歳などがあり、一五一六歳と二五一六歳と入門時に十年の隔りがある。在塾年限も三〇五年前後またはそれ以上に及ぶものがある。右のaグループは初めて蘭学に志す者で、bグループは或程度の既習知識を得ている者が多く、したがって学力の高低に個人差があつたのも当然であらう。その点で能力本位の進級制はいつそう実情に会つていたといえよう。

六、適塾の塾風

1、塾生の学習態度

福沢は「学問勉強といふことになつては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなからう」といい、当初、中津藩蔵屋敷から通塾していた一年間は蒲団を敷いて夜具の中に寝たことがなく昼夜区別なく勉強した。これは同窓生みなそうであつた。内塾生になつてからは、夕食後一寝入りし十時頃から徹夜で読書をし、朝食準備の音を相図に寝て、朝飯のできるころ起床、朝湯にいき、塾で朝飯をして読書するというのが適塾の常極まりであつたと記し

ている。まことにすさまじい勉強ぶりである。

2、会説後の解放感と奔放な生活

前に述べた月六回の会説は「月に六回の試験だから非常に勉強して居」ただけに、会説のすんだ当夜または翌晩に塾生は勝手次第に市中に出て大に酒を飲み暴れた。塾生の多くは士族でありながら刀を「皆質に置いて仕舞て、塾生の誰か所持して居る其刀が恰も共有物」の始末であり、「塾風は不規則と云はんか不整頓と云はんか乱暴狼藉、丸で物事に無頓着」「世間で云ふやうに潔不潔、汚ないと云ふことを気に止めない」自由奔放な適塾の塾風については、『福翁自伝』であまねく知れている。

しかしこれは、「四方より来り学ぶもの常に百人を超え」「畳一枚を一席とし」机・夜具などをおき起臥する(長与)集団生活にとつて衛生的にマイナスであつたことは『姓名録』に二七名の死歿者を見いだせることにも明らかで、コレラ、腸チフス、赤痢、肺結核、梅毒などの伝染病名が目につく。福沢じしんも、加賀の岸直輔のチフスを看病して感染し、中津藩蔵屋敷で倒れている。

右のうち梅毒については、橋本左内が書簡中で塾頭飯田柔平の弟秀輔(一八二)について「前月塾中無頼生に被誘引売婦家にて伝染致し候疾ニ御座候。然処其後下疳相発、腐蝕甚しく疼痛等も難凌容体」であつたのが、ようやく快方に向き帰郷療養のやむなきに至つたことを述べている。橋本は別の書簡で筧原良策にその弟健蔵(二〇七)の動静を報じ、塾内での指導を頼まれたことに同郷人としての責任を感じながらも健蔵の方が敬遠しているた

め、自分としては「御進学之御模様、且御方正之行等之義ハ乍影裡窃に喜居申候」と学業と品行への関心の様子を述べているように学業と同時に風紀が問題であった。

3、大坂の生活環境

まことに「天下の台所」大坂という大都市の生活環境は多感な青年にとって必ずしも良好なものとはいえなかった。橋本左内じしんも恩師吉田東篁から「予竊以為、浪華天下都會、率皆膏粱子弟輕俠凡流、其学者固亦雖復不少、善守其志、而不失之者、百無一二也」と戒められた。左内はその期待を破らなかったが、同窓の宮永良山（二三六）が帰郷するさいに、その卒業を祝った後で当時の蘭学生生活状況にふれて、「世之学和蘭之方技術芸之徒、概皆無頼凡流之子弟、不至沈湎於酒漁於婦女押般佚、習傲情、而侵制度數倫常者鮮也」ときびしくその放蕩無頼の生活を批判し、「其大則不啻毀其身体傷其髮膚、辱戮連及其父兄者亦間々有」と健康をそこね、父兄に迷惑を及ぼす者のあることを憂いて、良山の自重を望んでいる。

橋本左内や福沢諭吉らにとってはこうした生活環境は反面教師としてプラスの効果をもたらしたのであるが、環境におし流されて墮落する者の少なかつたことも見のがしてはなるまい。

七、塾生出身の地域的・階層的特徴

蘭学者の出身の地域的・階層的考察については原平三・沼田次郎・片桐一男氏ら先学の業績がある。したがってここでは類似する作業は省略して、特徴の把握にとどめよう。

幕末洋学史における適塾の地位（長尾）

1、地域的分布

適塾と象先堂を比較するために、集中度の高い上位一五位までを抜くと第4表のようになる。象先堂が肥前・武蔵に、適塾が備

第4表 地域的分布の比較

適 塾			象 先 堂		
①	肥前	35	肥前	53	
②	周防	31	武蔵	34	
③	加賀	28	羽前	21	
④	越前	25	伊予	15	
⑤	長門	24	長門	14	
⑥	備中	23	陸中	14	
⑦	伊予	22	下総	12	
⑧	安芸	20	紀伊	12	
⑨	武蔵	20	陸前	12	
⑩	備前	19	後岐	11	
⑪	筑後	19	讃岐	9	
⑫	摂津	17	越前	9	
⑬	丹後	17	丹後	8	
⑭	播磨	15	駿河	7	
⑮	讃岐	14	美濃	7	
合 計			329	238	
全体比			51%	58%	

中・備前・畿内に集中して多いのは、それぞれ生国と地元との関係を示し共通であるが、世にいわれる東西二大塾が全日本をほぼ二分しながら重なりあっていることはこれだけでもつかめる。

2、階層的分布

象先堂については原平三氏の調査がある。⁽²⁶⁾総員四〇六を二分して、(1)武家階級一七九(44%)内訳として幕吏二、藩士一三八、準藩士一二、その他武家階級と推定されうる者二七、(2)その他二二七(56%)という数字をあげて、医家の塾でありながら、武家階級の多いことに注目している。原氏の推定の根拠は、医者は通称名の音読、武士は訓読した当時の慣習によるとされているが、この基準はいまいである。沼田氏片桐氏も指摘しておられる。

適塾の特徴をつかむため便宜上福沢や長与の在塾のころ、安政元年以降十一年間にしばって出身階層を年次的に分類してみると

第5表のようになる。

第5表 適塾生出身階層表

	幕吏	藩士	藩医	町村医	その他一般
安政 1		1	14	18	6
2	1	4	13	7	15
3		1	12	12	11
4		1	14	4	15
5		3	10	8	11
6		5	20	17	10
万延 1		2	16	12	17
文久 1		1	19	7	13
2			2	3	10
3			6		2
元治 1		4	2	6	4
	1	22	128	94	114
			222(62%)		

これで見ると、医師二三名にたいし、武士に医師でないその他一般を加えても一三七名、その比率は62%、38%と圧倒的に医師が多い。

ちなみに分類基準は次の四項をたてた。①幕吏、②藩士は〇〇家中、〇〇藩と記したものの、③藩医は〇〇侍医、または〇〇藩と冠した医師らしき姓名のものに、城下居住の医師らしき音読の姓名あるものを加え、④町村医は城下居住を除いた音読の姓名のもの、⑤藩籍表示もなく③④に属しない、訓読姓名のものとした。

この表でわかることは、(1)適塾は象先堂と比べて、全体比率で武家階級が少なく、医者の子弟が圧倒的に多い。(2)医者の階層の

中で藩医と町村医の差は大きくない。一応藩医に加えた城下居住の医師中にも民間医が相当あるうから、民間医の仕官医にたいしての比率はもっと高まる(事実、藩医、侍医、または〇〇藩、〇〇城内と肩書した者は右の一二八名中、四九名にすぎない)なお「その他一般」に入れた者の中にも、退塾後帰郷して在郷民間医を開業した者が、適塾記念会の追跡調査で少なくないことが知れる。

以上を総合してみると、福沢が『福翁自伝』で、塾生はたいていみな医者の子弟といい、全体は医者の塾であるから衛生論も喧しく言ひさうなものと、医師の塾であるから、政治談は余り流行せずとか、医書窮理書の外にいぞそんな原書(築城書)を見たことがない、などと述べていることの裏づけができたようである。

八、「医師の蘭学」と「草莽の蘭学」

1、幕末洋学の特徴と適塾の役割

福沢は「宝暦明和以来八九十年間の蘭学は医師を蘭学にしたるものなれども、弘化嘉永以後の蘭学は士族を蘭学にしたるもの」と演説した。これを引用して沼田次郎氏は幕末洋学の歴史的特徴を「医師の蘭学より武士の蘭学」への進展とみている。⁽²⁷⁾ 癸丑の米艦渡来を契機に幕府の官学としての著書調所の設立、長崎での海軍伝習開始があり幕臣・陪臣の洋学習得が国策化され、諸藩またこれに応じたから、幕末洋学を「武士の洋学」と特徴づけても誤りとはいえない。

そして、右の階層的推移に対応し、幕末洋学が軍事的・体制補強的な方向に質的転換をしたとみることも、官学―藩学に視点をあければ正しいといえよう。

しかし、主題の適塾や象先堂の役割をも「武士の洋学」「軍事的・体制補強」としてとらえることは、上に述べた塾生の階層的分布からみても、さらにその出身者の医師、とくに在郷民間医としての活躍（とくに牛痘活動）からみても正しいとはいえない。

これについては「適塾門下生調査資料」が追跡調査し、田崎哲郎氏が三河および遠州地方で適塾・象先堂出身の在郷民間医を跡づけているが、洪庵が文久二年四月六月に中国・四国地方に旅行して、地方在住の適塾出身の医師たちを歴訪し歓待されている記録『壬戌旅行日記』⁽³⁰⁾にも具体的にうかがえる。そこには、洪庵を頂点とする「草莽の洋学」が民間医の日常の医療活動をとおして民衆の間に浸透している状況がとらえられる。

適塾の幕末洋学史における位置は、武士の洋学、軍事的・体制補強への傾斜を強めていく官学としての洋学にたいして、医師の洋学を堅持し、草莽の洋学を浸透させていく私学の独自性を発揮した点に第一に特徴づけられるべきであろう。

2、医師養成のための一般教養課程

「元来適塾は医家の塾とはいへ、其实蘭書解説の研究所にて」兵学家・砲術家・本草家・舎密家など「凡そ蘭学を志す程の人は皆此塾に入りて其支度をなす」「当時第一の蘭学塾」と長与専斎は、適塾が医師養成目的をもちながらも一般教養を教育内容としていた現実を述べている。これは、長与が長崎でボムベからうけ

た専門医学教育に対比して特徴づけたことばであって、適塾の「医家の塾」であることをむしろ明確に表現していることはまちがいない。

しかも、そこに医師以外の世界で活躍する多方面の俊秀が巣立ちえた要因が、適塾の教育内容にたいに胚胎していたことを示しているものでもある。開港に前後する政治・社会情勢が医師志望で適塾に入塾した者の基礎教養をも政治や軍事の領域に利用することを要請したとみるべきであろう。

3、全国的基盤

適塾が「当時第一の蘭学塾」となった要因の一に、洪庵じんの学力が、上方・江戸・長崎という蘭学の三大中心地で習得されたものであり、かれの視野が広く識見が高かったことがあげられる（長与がボムベに就学したのも洪庵の勧めによる）。私塾とはいえ適塾の地位が全国的基盤に立っていたことは、象先堂との人的交流関係にもうかがえる。

① 適塾出身者で象先堂にさらに入塾した者に、東条永庵（九黒田行次郎（二八）（福沢の「偽版問題」を後におこした人）、武田斐三郎（一一七）、佐野栄寿（一二三）（常民）、織田貫斎（二三五））ら二五名を数える。⁽³¹⁾

② 象先堂出身者で適塾へ入塾したものは両塾での入門年月日の明瞭なもの二名であるが、事実はいっと多いであろう。しかも、これに関連して記すべきは、在江戸の蘭学の大家たる伊東玄朴・坪井信道・箕作阮甫の近親や関係者が適塾に入門していることである。

伊東玄朴関係では、①伊藤玄敬（八五）が弘化三年九月、坪井信道の斡旋で入塾。玄朴の養子。②野中玄英（一〇一）は玄朴の養子となったが不身持のため離縁。弘化四年三月入塾。③織田貫斎（二三五）嘉永五年入門同じく六年玄朴の養子、と弘化と嘉永年間に集中している。

坪井信道の関係では坪井信友（二三九）があり、箕作阮甫関係では養子の菊池（箕作）秋坪（一五七）が嘉永二年四月入門、閏月入塾している。

右のうち伊藤玄敬を適塾へ入門させるについては「読書第一之事ニハ候へ共、艱苦ヲ嘗メサセ候事」「外ノ御門生同様ニ何事モ無御遠慮御使令被下候様」と願う玄朴の心情と、坪井信良について「繁華之地ニ居リ心魂とろけ候様ナル人物ナラハ早々とろけ候方宜敷候、何れ終身江戸ニ居住不仕候而ハ不相叶義ニ候へハ繁華差支候而ハ⁽³²⁾迎も致方無之」と懇願する信道の心情が、坪井信道の書簡にみえる。ここでは親元を離れて他郷の水を飲ませることによる人間形成を、信頼する洪庵に托そうとした江戸蘭学の指導層の姿がうかがえる。

適塾から象先堂への進学には、一には当代蘭学塾中一頭地をぬいた伊東玄朴の蔵書閲覧を志したもの、⁽³³⁾二には幕府奥医師となり蘭法医の最高の地位になった玄朴に立身栄達のコネを得ようとしたものがあつたことが推察できる。

こうした適塾と象先堂、緒方洪庵と伊東玄朴の友好関係から、洪庵じしんも玄朴らの推挽により文久二年八月に奥医師となり、ついで西洋医学所頭取に任ぜられた。沼田次郎氏が、幕末洋学の

主流を体制内の立身栄達——為政者への接近を指向する為政者指向型におかれた所論は、洪庵じしんのばあいも適用しうる結果となっている。⁽³⁴⁾適塾の教育方法はしばらく西洋医学所において存続するが、翌文久三年六月の洪庵の急死で終わりをつける。

九、適塾と福沢諭吉

——「福沢屋論吉」前史として

1、人間関係の拡大

福沢が適塾生活（安政二―五年）から得たもので重要なものに全国的な交遊関係の形成がある。かれは師洪庵に先だち安政五年「十月中旬着府」江戸築地鉄砲洲の奥平藩中屋敷に蘭学塾を藩命により開設したが、十一月二十二日付で緒方塾の学友にあてて、着府後「微に江戸の人物にも面会仕候。先日村田（蔵六）へも相訊、折角兄の御噂仕候」といい、「其後御国元の都合如何に御座候哉。事に依り御出府も可相成哉。夫のみ相待居申候。私も何れ三、四年は滞遊仕候様可相成」と述べ、著書調所教授手伝をしていた村田をはじめとする適塾出身者との交遊を述べ、在塾生の着府を期待している。⁽³⁵⁾洪庵の『勤仕向日記』にも着府当日「村田蔵六、坪井信道来ル」、翌日「早朝村田蔵六来リ、種々世話いたし呉ル」とある。師弟・同窓・同学関係の親密さがわかる。「学塾の師弟はまさしく親子のとおり」⁽³⁶⁾「書生は皆活発有為の人物であるが、一方から見れば血氣の壮年、乱暴書生ばかり」であるがそれだけに「いたって仲のいいもので決して争いなどをしたことはない」と福沢が述べた適塾の集団全寮生活は、福沢の人間形成

に大きく寄与したが、同時にかれの江戸における新しい進路を開く上に有力な人間関係の軸を提供したと思われる。かれが英学発心をして著書調所教授職筆作阮甫に会ってさっそく入門を許可された時も、師洪庵との間のコネが役だったであろうし、英学の友を求めたさいの神田孝平は象先堂出身であるが、村田蔵六と原田敬策は適塾の同窓であることをみても、察せられる。

2、福沢の在野性・通俗性

福沢が適塾生活から得た生活態度の面での収穫は、上に述べた塾風の反面教師としての側面がある。「酒とたばこ両刀使い」は終生やまぬ悪癖となったが、かれは「血に交わりて赤くならず」浮気な「花柳社会のことも他人の話を聞きその様子を見てたいてい細かに知っている。知つていながら自分一身は鉄石のごとく大丈夫」「ついで茶屋遊びを」しない「清浄潔白」な生活態度を堅持した。青春を謳歌した塾生とともに町人の都大坂の庶民生活にじかに触れて多様な生活経験をしたことは、その後の福沢に在野性と通俗性を植へつける上に大きな寄与をしたものといえよう。文明開化期における啓蒙思想家福沢、そして『福沢屋論吉』なる出版者としての成功は、既にここに胚胎していたといえよう。

3、想定読者を意識した平明な文体

しかし福沢の後半生からみて最大の収穫は、師洪庵から得た著訳のあり方についての教訓であった。『福沢全集緒言』⁽³⁾の中でかれは、「余が文筆概して平易にして読み易き」は世の定評であり自らも信じて疑わない特徴であるとし、その由来を洪庵に帰している。すなわち江戸の杉田成卿が「一字一句を苟くもせず原文其

の儘に翻譯するの流義」で、「字句文章極めて高尚にして俗臭を脱し」た「熟読幾回趣味津々として尽きざるの明文」であったのに対し、洪庵は「翻譯は原書を読み得ぬ人の為めにする業」であり、「原書に拘泥して無理に漢文字を用ひ」「訳書と原書と対照せざれば解すべからざるに至る」のを笑ふべしとし、「返すくも六かしき字を弄ぶ勿れ」といしましめた。福沢は常にこれを「心に銘じて爾來曾て忘れ」たことがなく、「筆端に難文字の現はれんとすることあれば、直に先生の警を思出して之を改」めたといっている。福沢が『西洋旅案内』『窮理図解』等において「百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越に聞か」せても何の書かがわかるくらいでなければ本意でないとし、「殊更らに文字に乏しき家の婦人子供等へ命じて必ず一度は草稿を読ませ」たというアイディアは、洪庵が『築城書』の翻譯にさいして福沢に、「無学不文の輩」たる武家のために訳す兵書に「難解の文字は禁物」と厳に注意したことに発している。想定する読者に対応し、平明な文章を身近の題材によって表現するテクニクは福沢の最大の特徴で、幕末・明治初期のベストセラーを生み出す大きな要因であるが、それこそ適塾で得た代えがたい収穫であったといえよう。

4、福沢の科学主義、合理主義の基礎

福沢の啓蒙思想家としての強味は、万延、文久、慶応と三度にわたる欧米旅行ならびにそれと表裏する幕府外国勤務生活によって得た外国事情への通曉にあるが、それを支えてのり豊かにしたものは適塾において習得した科学にかんする一般教養であっ

た。かれは再入塾にさいし家老奥平沓岐所蔵のベルの築城書を盗み写した写本の贋訳をするという名義で食客生となることを洪庵から認められ「うそから出た誠で」贋訳したと述べているが、

「医者」の塾「プロパー」の医学や薬剤の調査、解剖はもとより、機械・物理や化学実験、さらにはエレキトルについても「当時の日本国中最上の点に達」する知識までも得たのである。咸臨丸で渡航したさいも、福沢はガルヴァニの鍍金法やテレグラフ、砂糖製造所での真空沸騰など相手は懇々と説明するが「こっちは日本にいるうちに数年間そんなことばかり穿鑿していたのであるから、ソレは少しも驚」かなかったといい、文久遣欧のさいも理化学・器械学などは「自分で原書を調べて容易にわかる」からと政治的・社会的な諸制度に鋭い関心を示している。

福沢の思想家としての意義は、国民独立の精神の鼓吹と科学主義・合理主義の確立にあるといってもよい。⁽⁴⁰⁾そして、この科学主義・合理主義は『福翁百話』でみずからが語っているように、最新のアラデーの電気説に「震動」させられるほどに重きを物理学においていた、適塾に負うものであり、また「人身の構造組織を示すは解剖学（アナトミー）にして、その働きを説くものを生理学（フヒシヨロジー）といい、この身体を健康に保つる法を教うるは健全学（ハイジン）なり」とし医学・生理学の重要性を説き、『日本婦人論』（明治十八年）『男女交際論』（全十九年）で生理学的考察で婦人解放論を展開することにもあらわれている。⁽⁴¹⁾適塾という「医者」の塾は、物理学・化学と医学・生理学についての基礎知識を福沢に習得させ、それが啓蒙思想家として、ま

た出版者としての、福沢の成功の基礎を固めたのである。

結 び に か え て

一、幕末洋学は軍事的、体制補強的方向に傾斜する「武士の洋学」として立身榮達を志向する性格を強くする官学―藩学を主流とするものになっていったが、その中にあって適塾は、在野の最大私塾として多数の民間医を養成し「医師の洋学」の伝統を保持し「草莽の洋学」を拡大する重大な役割をになった。

二、福沢諭吉こそは適塾教育から最大限にそのエッセンスを吸収した人物であり、かれの啓蒙思想家として、私学の独自性を確立した教育家として、また出版者『福沢屋諭吉』としての成功の基盤は、実に適塾の中で築かれたのである。（四九・一一九 改稿）

注

（一）幕末洋学に関する学説史については、高橋碩一『洋学思想史論』（S・47）これに『洋学論』（S・14）が収められている。

沼田次郎『幕末洋学史』（S・26）『洋学伝来の歴史』（S・41）なお手短かには、『明治維新史研究講座』第二巻『洋学とその変質』（S・33）などを参照するとよい。

（二）これは『幕末洋学史』からの引用であるが、『洋学伝来の歴史』では、「武士階級の出身者以外は大部分医師であり……」とし、医師か下級武士から出た者が洋学者に多かったのに比べて庶民の出身者は少ないとしている。（二〇四―五ページ）ここでは出身者の階層に視点がおかれ、その活動面での庶民との接触のすがたは捨象され

ている。

- (3)・(5)・(8)・(21)・(32) 緒方富雄「蘭学者の生活素描」『科学思潮』S18・1・8)

- (4)・(6) 緒方富雄『緒方洪庵伝』(S・38) 六一〇ページ。一八四―三〇二ページ。なお『緒方洪庵適々斎塾姓名録』(S・42)が単独に出ており索引もあって便利である。(9) 緒方、前掲書九五ページ

- (7) 沼田次郎『幕末洋学史』一八四―一五ページの象仙堂、適々斎塾の比較を基礎に作成。ここでは入門数増加が米艦来航による海防の重要性の認識に相応するとしているが、嘉永二年の「病学通論」刊行とくに古手町除痘館開設を見のすべきでない。宗田一「越前の適塾門下生考」(蘭学資料研究会研究報告一八二号)参看。

- (10) 長与専斎『松香私志』これは日本医史学会編「医学古典集2」に収められている。

- (11) 池田謙斎『回顧録』(T・6) (12) 福沢諭吉『福翁自伝』

- (13) 緒方、前掲書八九ページ、なお『福翁自伝』参看

- (14) 『橋本景岳全集』(S・18) 上巻三一ページ、笠原良策あて。(15) 同上三六―八ページ

- (16) (a) 謙斎は江戸の医学所の入費を二分―三朱と記している。

奥山が熊本に帰郷して蘭学を講じ、その門下生を適塾に進学させていることが『橋本景岳全集』上巻一七ページの書簡中にみえ、『大村益次郎』(S・19)には奥山が天保十五年弘化頃入塾し、塾長五年以上をやったが、他にえらい人物が来ると塾長を譲り、その人が去るとまた塾頭になったと記している(一一三ページ)。ちなみに大村は適塾入塾一年で長崎で奥山に蘭学を学び、嘉永元年また適塾に再入門した。

幕末洋学史における適塾の地位(長尾)

(17)

この書簡で橋本は飯田の世話を笠原良策に依頼し、六月五日付でも重ねて懇請している。その結果笠原の承諾を得て礼状を出したが、洪庵が飯田の福井行を許さず、そのうちに飯田の弟が後に述べるような病氣にかかりついに福井行が不能になった経緯が委しくわかる。(二一―三五ページ)

なお橋本左内の適塾生活について、板沢武雄「蘭学者としての橋本景岳」(『伝記』橋本左内生誕百年記念号S・10)は、景岳先生自身で記されたものを拝見出来ないのので『松香私志』によって記述するとされているが、この小論でとりあげているように重要な側面を描いている点が少なくない。

(18)

『緒方洪庵伝』所収。七月一日条には「不埒之事有之、破門す」とある。なお安政三年に洪庵が加賀大聖寺藩医渡辺卯三郎(適塾出身、一三一)の塾に入っていた次男平二(惟準)四郎(惟孝)のがれて、大野藩の洋学館に入り、伊藤に就いた。父の許しをうけずに行動したことに対し、洪庵は二人とも勘当している。『伝』一六八ページ)さきの飯田や伊藤のばあいとともに、塾生やわが子の進退に厳しい態度が知れる。

(19)

この項「福翁自伝を読む会」での教示によるがなお後考をまつ。

(20)

伊東栄『伊東玄朴伝』(T・5)

(21)

『橋本景岳全集』上巻・三四ページ、嘉永四年七月二十

五日付書簡。(22) 同上 三九ページ。(23) 同上 一四ページ。(24) 同上 一六ページ

(25)

原平三「蘭学発達史序説」(『歴史教育』第一一巻第三号S11・6)。沼田次郎『幕末洋学史』(S・26) 片桐一男「蘭学者の地域的、階層的研究」『法政史学』

(第三号)

片桐氏は大槻玄沢の芝蘭堂、小森玄良の小森塾とともに四個の塾につき塾生の出身国を比較して表としている。第4表はそれにとづいて抽出した。

(26) 原平三、前掲論文

(27) 『幕末洋学史』一四一ページ以降。

(28) 大阪大学適塾記念会『適塾門下生調査資料第一集』(S・38)『第二集』(S・49)

(29) 田崎哲郎「幕末洋学についての一考察」『日本歴史』二七一号。『多摩文化』23号の青木(湯浅)芳斎も好例。

(30) 『緒方洪庵伝』所収

(31) 中には大島圭介(二三一)のように適塾を出て安政元年坪井芳州塾に入門するケースもあった。

(33)

『伊東玄朴伝』は玄朴が「舶載の蘭書は悉く是を買い、其価の貴きを問はず……蘭学を学ぶ者単に玄朴の蔵書を見んとして其門に入る者あるに到る。加之幕府奥医師となるや、幕府の蔵書も亦涉獵して余さず」とその蔵書の量と質について記している。

(34)

洪庵の奥医師就任は伊東玄朴らが推挽し内交渉があったが、「老後多病の身、进而も御奉公杯動まりかね」と辞退していた。洪庵は出身藩たる足守藩木下侯の侍医として三人扶持をはみ、福岡藩黒田家の「お出入医」(福翁自伝)、大坂城中や大阪在住武家屋敷への回診、「列侯東觀經大阪者罹疾必求診」(古賀増撰「侍医兼督学法眼緒方洪庵之墓」墓碑銘)と町医者ながら武士階級との接触が多かったから、奥医師動仕は「先祖への孝と相成り、子孫の榮とも相成」とは思いつつも「老後の勤め、中々苦勞の至、殊に久々住馴たる土地を放れ候事、経済に於ても甚だ不勝手。実に世に謂ふ有難迷惑」であ

るが「道の為め、子孫の為め、討死の覚悟」でひきうけた(文久二年六月十七日付、在長崎の二子あて書簡)。事実、三十人扶持、貳百俵足高、御番料貳百俵の奥医師と手当三十人扶持の西洋医学所頭取兼帯での幕医としての公務は、「身分こそ高く相成難有」いが「是より大貧乏人と相成、年老て苦勞」と述べている。

しかしこれは体制内の立身榮達指向と無縁ではなく、適塾の在野性への限界を示すものが見える。この点は福沢の中津藩蘭学塾開設、外国方出仕以降の経歴の中にも在野性と共存する権力への接近・利用がみられるのと類似している。なお上田稷「緒方洪庵をめぐる社会的側面」(『日本洋学史の研究』II)参照。

(35)

(36) 『福沢諭吉全集』別巻一五ページ

(37)

『福翁自伝』にみえることば。『癸丑年中日次之記』には「元日、早朝塾中諸子年頭祝盃如例」以下、医師としての大坂城中や東西奉行所など回診記事とともに、塾生や塾出身者関係の記事も多い。一月二十七日条には「午前不快平臥。大島圭介に按摩頼む」とある。

(38)

(39) 『福沢諭吉全集』一卷 三一六ページ

適塾の塾則は伝わっていないが洪庵のよき協力者であった義弟郁蔵が、のち独立して開いた独笑軒の塾則は第一に「蘭学を学ぶと雖も、常に我庵の道を守り、国体を失すべからず。」とあり、これは洪庵が常に「国のため、道のため」「当今必用の西洋学者」育成を言いついたのと相応じ適塾の教育理念であったらうと『緒方洪庵伝』九五ページは述べている。ここにも福沢との一致がみられる。

(40)

(41)

家永三郎『福沢諭吉』(現代思想史大系2解題)S・39
昆野和七『福沢諭吉・女子教育論』解題 S・21